めでぃかすとる Médicastre

一般社団法人 鶴岡地区医師会 基本理念

鶴岡地区医師会は、地域住民の健康維持・増進と健やかな長寿社会の実現のために地域に貢献するとともに、医の心を忘れず知識と技術の向上をめざし、不断の研鑽に励みながら日々前進する組織をめざします。

「 辰年の年男・年女 」

鶴岡地区医師会　　令和 6 年 **1 月号**

年頭のごあいさつ

年頭あいさつ

一般社団法人 鶴岡地区医師会
会長　福原　晶子

明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

暖冬で雪の少ない年末年始となり、皆様方も、穏やかな新年をお迎えになられるかと思われた中、１月１日発生の能登半島地震、２日の羽田空港航空機事故の発生は、ある意味衝撃的でした。当地域でも、沿岸部にお住まいの方は津波警報により避難をされた方も多くいらしたとお聞きしております。直接の被害がなかったのは何よりですが、新年早々、ご心配・ご不安になられたのでは、と推察しております。お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された地域の、一刻も早い復興を願っております。また、災害に対し、改めての心積もりと準備が必要なことを痛感させられました。

昨年５月に新型コロナウイルス感染症も５類へ移行し、世間一般的には通常の生活に戻ったような感があります。しかしながら、昨年は新型コロナ以外の感染症も多数発生し、季節性インフルエンザについては、例年よりかなり早期から発症者があり、免疫のない若年者を中心とした流行となるなど、感染症に関しては以前とは異なった様相となりました。その中で、会員の先生方には、新型コロナあるいはインフルエンザを主とした感染症患者の受診状況を、メーリングリスト（ML）上に情報提供していただき、誠にありがとうございました。この４年間で、当地区の限られた医療体制でも、ワクチン接種や発熱患者の診療などに対応ができましたことは、以前より構築してきた医療連携と、皆様方の地域医療への心意気のお陰と思っております。この場をお借りし、重ねて御礼申し上げます。

マスク着用の廃止や施設での面会規制の解除など、様々なご意見もあるようです。市民の皆様も、医療機関への受診に際しマスク着用をお願いしていても、装用していない場合も多くなりました。逆に、首都圏においては、もはやマスク着用の必要性はなく、いつまでもマスク着用を強制するのは、世間一般の観念からかけ離れ遅れている、等というご意見もあるようです。しかしながら、新型コロナ・インフルエンザに限らず、各種感染症の予防においては、施設内に持ち込まない・広めないという考えから、マスク着用は依然として有効であると捉え、時と場合により、今後も着用をお願いしていきたい所存です。

さて、医師会としては、会員数の減少と高齢化による諸問題が長年の懸案事項となっております。日常の診療や救急医療、特に小児救急については、小児科専門医以外の協力や体制の見直しなどが急務となっています。加えて、校医・産業医・嘱託医を辞職する方も増えており、健診事業や警察検案業務の協力、休日夜間診療所への従事など、ご担当を確保することがますます困難な状況です。今後、特に救急医療の体制については、様々なご意見を頂戴しながら、どのように実施するのが最も良いのか、検討していく予定です。どうぞ、皆様の更なるご理解とご協力を、改めてお願いする次第です。

また、昨年11月末から、医師会イントラネット上で運用していた医師会員向けのMLを、インターネット上に新たに構築しました。今まで以上に、使い勝手が良くなっております。是非、医療連携や医師会活性化のために活用して頂ければ幸いです。

年頭のごあいさつ

新年を迎えてのご挨拶とご報告

～令和５年の、そして令和６年の、
鶴岡市立湯田川温泉リハビリテーション病院～

鶴岡市立湯田川温泉リハビリテーション病院
院長　武田　憲夫

鶴岡地区医師会会員の皆様、医師会職員の皆様、令和６年、明けましておめでとうございます。本年も宜しくお願い申し上げます。旧年中は、当院運営に関して、色々とご指導、ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

新年に当たり、令和５年度のご報告と令和６年の当院の主な方針をお話しさせて頂きます。

まず、当院にとって深く悲しい出来事は、昨年10月16日の当院内科医長、上野寿樹先生のご逝去です。２年にわたる闘病生活を送られて、腫瘍マーカー上では治療の効果が上がっているように見られ、まだまだ頑張れると我々も、おそらく先生も感じていた矢先の、急なご逝去でした。享年64歳と、医師としては益々の活躍が期待される年代でした。無念でなりません。先生がいらっしゃらなくなった病院の穴は大きく、色々手を尽くしておりますが新たな医師の補充ができておりません。医師会に窮状を訴えて、健康管理センター南部知子先生が、お忙しい中、支援して下さっております。南部先生には、深く感謝申し上げます。

コロナウイルス感染症、インフルエンザ感染症に対する対応は、今しばらく緊張感を持って、従来の方針を維持して行きます。ご面会にも、対面面会制度は導入していますが、ご高齢者、認知症患者さんが多い当院では、一定の制限は設けさせていただいています。県内病院の中にも、最近でも60名もの多数の院内感染者が出た病院もあり、ご理解下さい。

この４月から導入される、「医師の働き方改革」も、当院にとって大きな問題です。この件に関しては、本誌前号で私の考えを延べましたので省略いたしますが、院外の諸先生方のご支援なくしては当病院の運営は成り立ちません。医師不足も重なり、職員の皆様には、不便、不都合なことが多くなり申し訳なく思っております。当然、常勤医師の役割は、時間的にも量的にもこれまで以上に多くなりますが、そのことは当院医師として十分覚悟の上ですので、非常勤医師には判断が付きにくい状況など、これはと判断された場合には、遠慮なく主治医、担当医に報告し、指示を受けて下さい。

当院の医療レベルを維持するため、今や電子カルテ導入は必須の事項です。日本で本格的に電子カルテが導入され10年以上経ち、今や医師は勿論、その他の医療従事者でも電子カルテありきで仕事、医療業務が動いており、電子カルテのない医療行為は考えられないのが現状です。国の医療DXに向けての動向も決まっています。光ファイバーによる院内LANの整備、PACSの導入と電子カルテ導入への当院のインフラ整備は終わっており、２－３年以内の導入を目指したいと思います。この１年で情報収集と当院に相応しい電カルシステムの構想を作成し、予算要求をしたいと思います。

また、来年度予算では、当院で初めて、リハビリテーションロボットの導入を要求しています。リハビリ分野におけるロボット技術の応用は、リハビリテーション医学会でも期待しており、これから大きな役割を占めると思われます。当院では初期段階での導入ですが、鶴岡市のご賢察をお願いしているところです。

以上、新年を迎え、ご挨拶と、ご報告をさせていただきました。

第43回 市町長・部課長、庄内保健所、荘内病院 こころの医療センター、医師会役員懇談会

日時：令和５年12月12日(火) 18：30～
場所：東京第一ホテル鶴岡

12月12日、東京第一ホテル鶴岡において、第43回市町長・部課長、庄内保健所、荘内病院、こころの医療センター、医師会役員懇談会が開催されました。

鶴岡市長 皆川 治 氏よりご挨拶をいただき、鶴岡市健康福祉部地域包括ケア推進室長 齋藤 芳 氏、庄内保健所長 蘆野 吉和 先生、鶴岡市立荘内病院長 鈴木 聡 先生、鶴岡地区医師会理事 三原 一郎 先生より話題提供をいただきました。

詳細は抄録をご覧ください。鶴岡市立荘内病院および鶴岡地区医師会の抄録は、次回３月15日号に掲載いたします。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

介護認定ファストパスのトライアルについて

鶴岡市健康福祉部地域包括ケア推進室長　齋藤　芳

（はじめに）

鶴岡市では、今年11月から荘内病院と鶴岡協立病院からご協力いただき、新型コロナ感染症や急性期等で急に入院された方等が、その後、円滑に医療から介護につながるための取り組みとして、要介護認定を申請から１週間程度で決定する「介護認定ファストパス」にトライアルいたしました。

今回のトライアルでは、要介護認定までの期間短縮が実際に可能であるかの検証、期間を短縮することでの課題の抽出を目的に、対象者を「介護認定を受けていない方、かつ入院が長期化することで身体機能が低下すると思われる方」とし、荘内病院と鶴岡協立病院の２病院に各１名の選定をお願いしました。

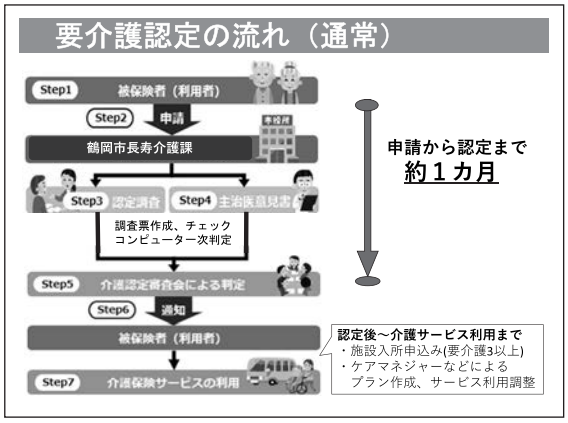
（ファストパスにおける要介護認定の変更点）

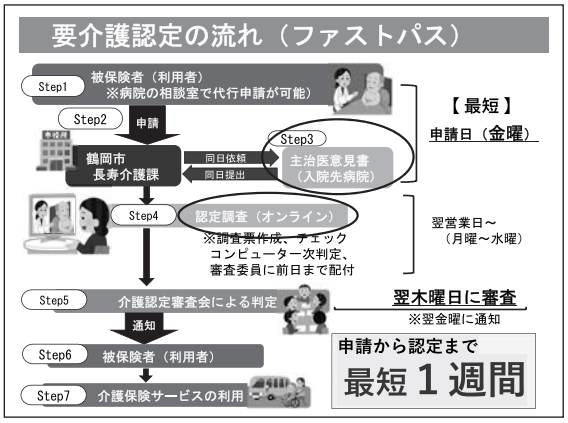
通常の要介護認定は申請から認定までは約１カ月を要することから、ファストパスではスピードアップを図るために次の２点を変更しました。

①主治医意見書を、申請日同日に市から主治医に依頼し、同日に市に提出いただく

②認定調査方法を、訪問からオンライン調査に変更

これにより、申請から最短１週間での認定が可能と見込みました。





（経過）

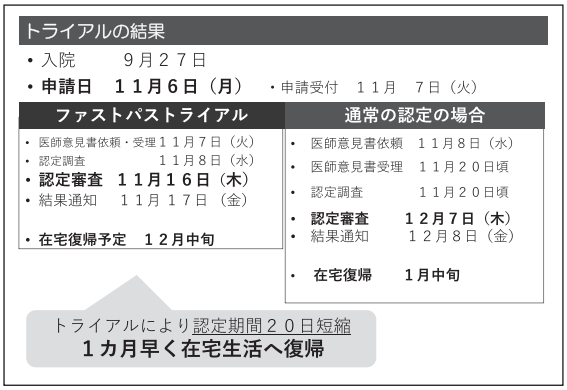
荘内病院を通じた申請事例は、85歳の女性、急性腎障害、高カリウム血症で９月27日に入院。申請段階では、ご自宅復帰が出来るか、施設入所が必要か、退院に向けた検査結果待ちの状態でした。

11月６日(月)に荘内病院地域医療連携室による代行申請があり、市では翌日７日(火)に受付、同日に主治医意見書を依頼・受理し、その翌日８日(水)には、担当看護師に同席いただき、オンライ

ンにて認定調査を行いました。翌週の16日(木)に審査会に諮り、申請から10日後には要介護４に認定されました。

現在、在宅復帰に向けた住宅改修やケアマネジャーによる介護サービス利用調整中で、12月中旬には在宅復帰が予定されているとお伺いしています。

通常の場合、認定審査会は12月７日、在宅復帰が１月中旬頃と見込まれますので、今回のトライアルでは、認定期間が20日短縮し、１カ月早く在宅生活に復帰できるという結果になりました。



（まとめ）

今回のトライアルでは、介護認定の申請から決定まで当初想定していた最短１週間を超えましたが、大幅に期間が短縮され、その後の介護サービス利用にも早くつながることが出来ました。一方、課題としては、ファストパスは先に申請されている方々を飛び越して認定することから、施設入所が必要な方に限定するか、どの段階で申請するのか等、対象者の規定等が必要であると考えられます。

引き続き、トライアルを重ね、対象者の規定や申請のタイミング等、実行に向けた検討を進め、さらに、今回のトライアルに限らず、全体的な介護認定の期間の短縮化に取り組んでまいります。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

地域医療構想の課題

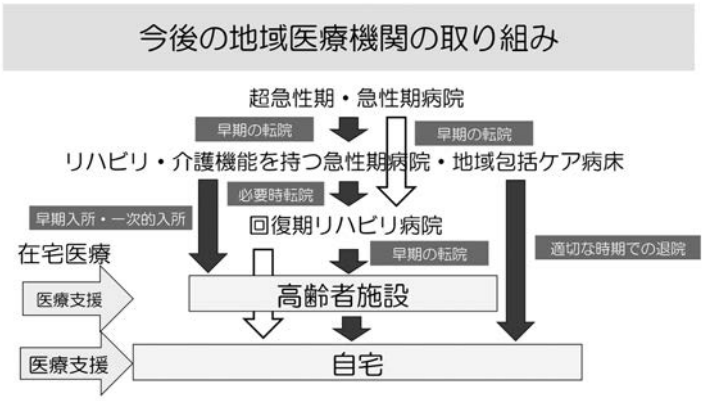
庄内総合支庁保健福祉環境部医療監　兼　庄内保健所長　蘆野　吉和

現在、2025年度までの地域医療構想および2024年度からの第８次医療計画の策定が進められている。今回、地域医療構想で特に課題となる事項について提示する。

今後の少子高齢化の進展に伴って発生する地域医療課題として、①寿命を迎えて亡くなる高齢者を、どこで、誰が、看取るのか、②需要が高くなる地域の医療福祉従事者をどのように確保するのか、③高齢化している病院および診療所医師の補充をどのように確保するのか、あるいは、少ない医師で地域医療をどのようにして維持してゆくのか、④高齢者救急医療への対応をどうするのか、⑤医療と介護の複合的ニーズをもつ高齢者にどのように対応するのかが挙げられる。

これら課題のなかでも特に地域医療構想で早急に対応すべき課題が高齢者救急への対応である。

すでに増加している高齢者救急では、軽症患者が多い一方で、脳梗塞・急性心不全・骨折・誤嚥性肺炎などの疾患で、入院患者がさらに増加することが推測されている。介護依存度の高い高齢者が入院することで急性期病院スタッフの業務が増えること、入院が長引くと入院関連障害で要介護者が増える、あるいは要介護度がさらに高くなる、平均在院日数が長くなり病院の経営状況が悪化する、そして、入院ベッドが埋まり、救急患者の受け入れ困難となり、地域医療は崩壊する可能性がある。



この状況を避けるために地域医療構想として取り組むべきことは、病院間の連携により、救急搬送された高齢者を、病状に応じて、早期にリハビリおよび介護支援が提供される環境に移動（転院・転所）する、高齢者施設での医療支援体制の強化を含めて、出口戦略としての在宅医療の受け皿を広げることである。

なお、この方向性は、すでに来年度の同時改定の議論となっており、診療報酬および介護報酬上で評価される可能性が高い。

山形県学校保健連合会学校保健功労者表彰

この度　栄えある表彰を受けられました。誠におめでとうございます。

長年にわたり地域の学校保健業務にご尽力された功績が認められ、
山形県学校保健連合会より表彰されました。（11月22日表彰）

わだ内科医院
和田　了 先生

犬塚医院
犬塚　博 先生

第16回　庄内プロジェクト　緩和ケア市民公開講座開催

日時：令和５年11月25日（土）13：30～
場所：いろり火の里　なの花ホール

鶴岡市立荘内病院　地域医療連携室　渡部　忠

第16回　庄内プロジェクト緩和ケア市民公開講座が令和５年11月25日（土）、三川町いろり火の里なの花ホールにて開催されました。当日は216名の来場者があり盛況に終了しました。

申し込み受付段階で、多数の方より申し込みをいただき、予定人数を早々に超えたため、残念ながら、後から申し込みいただいた方にはお断りさせていただくことになりました。

当日は「庄内プロジェクトについて」と題して、緩和ケアサポートセンター鶴岡・三川のセンター長　鈴木聡 荘内病院長が、庄内プロジェクト10年のあゆみと、緩和ケア普及の成果と今後について紹介しました。

続いて「僕は死なない。神様降参です。」の演題でOFFICE LEELA代表　刀根　健（とねたけし）氏より講演していただきました。刀根氏はステージ４の肺がんと診断されましたが、抗がん剤での治療に違和感を感じ、あらゆる代替治療を試みたが、脳や骨、肝臓、腎臓、両目にも転移。知人の紹介で訪れた東大病院で「治療を開始しなければ、いつ、呼吸が止まってもおかしくない」と宣告されて、観念。全てを流れのままに委ねる境地に達したところで、奇跡的に分子標的薬が適合し回復された方で、その時の体験談を語っていただきました。

終了後のアンケートでは「とても良かった74％」「まあまあ良かった24％」と大変好評でした。ほかにアンケートには「ポジティブに生きることが重要であると認識しました。」「素晴らしい講演をありがとうございました。努力、思考、頑張るではなく楽しいことワクワクすることを増やしていこう、感じていこうと思いました。」「講師の「死」に対する解釈がすごく腑に落ちました。楽しく生きることの素晴らしさを今回の講演で改めて考え直しました。とても楽しい話でした。」という記載のほか、多くの来場者から意見をいただきました。

庄内プロジェクトでは、緩和ケアの普及・啓発を目的として、市民公開講座のほかに、患者さんやご家族と医療者が語り合えるための「ほっと広場」の提供を今後も進めていく予定です。

令和５年度緩和ケア市民公開講座が、関係者の皆様のご協力で盛会のうちに終了することができ、深く感謝申し上げます。

講師の刀根氏

スタッフ集合

会場風景

表紙写真にご協力いただいた先生の紹介（敬称略）

佐藤　洋司　　蘆野　吉和

石原　　良　　本田　　学

上野　欣一　　佐藤　　匡

遠谷　　肇　　真島　英太　　奥山　泰裕

ご協力ありがとうございました。

新年の抱負（年男・年女）

佐藤　洋司（佐藤診療所）

あけましておめでとうございます。私も辰年を産まれた年を入れて８回も迎えました。思えば若い頃より僻地医療の一端を担って仕事をして来られたこと、その合間に釣りや写真などの趣味も楽しんで来たことなどを思うと感無量です。まだ何とか仕事ができることにも感謝し、妻や子供達にあまり世話にならないようにしたいと思います。

石原　良（荘内地区健康管理センター）

あけましておめでとうございます。６回目の年男となりました。荘内病院を退職後、健康管理センターにお世話になってから６年が経過します。健康管理センターは40周年を迎えました。３月15日に日頃からお世話になっております会員の皆様と祝賀の会を予定しておりますので是非ご参加ください。

上野　欣一（上野ファミリークリニック）

令和４年に古希を迎えたと思ったら、今度は６回目の年男ということで、“光陰矢のごとし”をしみじみ感じています。

この歳まで生を受けたことに感謝して、今年も充実した日々を過ごしたいと思います。

蘆野　吉和（庄内保健所）

今年で６回目の年男となります。鶴岡で年男を迎えたのは過去1964年（2012/十和田市、2000・1988/いわき市、1976/仙台市）。COVID-19中もその後も地域や全国活動としてやるべきことが満載ですが、ゆっくり温泉に入りたい。

本田　学（本田耳鼻咽喉科医院）

辰は陽気が動いて万物が振動する年と言われています。新しい年を迎え、世界情勢もより変動する中、皆様が健康で、幸せで、充実した人生を送ることを願っています。今後も新しいことに挑戦することを忘れずに過ごしていきたいと思っています。

佐藤　匡（鶴岡市立荘内病院）

今年還暦を迎えます。健康でもないし、長寿でもないし、まして赤ちゃんにもどると言われても、困るだけのような気がしております。時代の流れは、ますます早くなっていますが、今年は穏やかな１年であることを願っております。

遠谷　肇（オリーブこころのクリニック）

干支は節分で切り替わる習わしもあるようで、それからすれば私はギリギリ卯年ということになるのですが、その話を家族にするたびに「どうでもいい」と冷たくあしらわれています。ま、辰年生まれということで良いのでしょう。昇り竜のように運気が上向く年になるといいですね。

奥山　泰裕（奥山皮フ科）

鶴岡に帰ってきて12年とちょっと。いろいろとありましたが、昨年母ルミ子が引退しました。次の12年は基本の皮膚疾患に立ち帰り精進して参ります。あと、拾った猫と子供達にもう少し相手してもらいたいと思います。

真島　英太（真島医院）

明けましておめでとうございます。昭和51年、辰年生まれの真島です。

私は自宅の医院に戻ってから11年が経ち、さすがにこの企画に当たるようになりました。

去年は色々変化のある一年で、院長が父から私となり健康の大事さも感じるようになりました。筋トレやダイエットを始めましたが、飲み会には参加しますので医師会の皆様、今年もよろしくお願いします。

一般社団法人「回復期リハビリテーション病棟協会」の機関誌に、当院の取組が掲載されました。

鶴岡市立湯田川温泉リハビリテーション病院
院長　武田　憲夫

全国の回復期リハビリテーション病院（病棟）（約870病院）が加入している「回復期リハビリテーション病棟協会」が発行している機関誌の2023年10月号に、「良質な回復期リハビリテーション医療を支えるプロセス充実への取り組み」と言う特集記事が組まれました。この中に、当院の「転倒転落防止対策」が選ばれ、掲載されましたのでご報告いたします（図１）。この特集記事作成に当たり、編集委員会の趣旨説明には、「会員病院での秀でたプロセス充実への取り組みを紹介、アウトカム評価基盤強化の一助としたい」と記載されています。直近５年の間に「公益財団法人日本病院機能評価機構」が実施している「病院機能評価（カテゴリー：リハビリテーション病院）」を受審した認定病院（約400病院）の中で、各評価項目（現在は93項目）の中で最も優れている「Ｓ評価」を受けた病院の中でも、さらに優れていると判定された27病院が選ばれ、機関誌に掲載されました。当院が選ばれた評価項目の「転倒転落」は、当院のようなご高齢の方、認知症など高次脳機能に障害のある方が多く入院している病院における医療事故の中でも多くを占める原因で、その防止対策は、回復期リハビリテーション病院における医療安全の大きなポイントになっています。当院の「転倒転落防止対策」の歴史は、2013年（H25）にさかのぼります。この時院長として就任した私が、毎年集計される当院のアクシデントレポートを調べたところ、その70％が「転倒転落」であり、「転倒転落」が病院の医療安全問題の大きなウエートを占めていることがわかりました。そこで、転倒転落防止に関する学会シンポジウム参加や防止のための資料収集などを行い、病棟スタッフら職員が皆で学び、検討し、当院の「転倒転落予防マニュアル」を作成しました。このマニュアルを実践し、マニュアル作成前と転倒転落の発生状況を分析したところ、転倒転落は実践後に有意に減少しており、2015年のリハビリテーション・ケア合同研究大会に発表しました。以後これを基準にして、リスクマネジャーらが中心になり、現場スタッフ全員が転倒転落予防・防止に取り組んできました。その後、当院は、2015年および2019年に「病院機能評価」を受審しており、

そのいずれの際にも、当院の転倒転落への取り組みは「Ｓ評価」を受けております。この度本特集に当院が選ばれた理由は、2019年時点の取り組みに対しての評価によると思われますが、その後も、本記事のように当院の転倒転落率は減少しており、昨年度は2.1パーミル（‰）とこれまでで最低を示しました。因みに2022年度の日本回復期リハビリテーション病棟協会発表の転倒転落率の全国平均は3.7‰と、当院の２倍近い値です。我々の取り組みは、今も意義大きいものと思います。これからも、より安全な医療を目指し、職員皆で緊張感を持って取り組む所存です。

2.1.6　転倒・転落防止対策を実践している

転倒・転落防止チーム、リスクマネジャー会議 院内研修会が機能　職員の目配り、心がけも重要

一社）鶴岡地区医師会 鶴岡市立湯田川温泉リハビリテーション病院（山形県鶴岡市）

写真　患者ベッド周囲の配置例。リハビリバーと車いす（手前）、センサーマット（床）などを配置。自らのずり落ち、転落を極力防ぎ、転落時の衝撃力を減弱させる。ベッド脇のボードに転倒危険度（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）、ベッド環境・移動手段、センサーの種別とスイッチの位置、日中・夜間の ON/OFF 別などを略記し情報共有している（矢印）

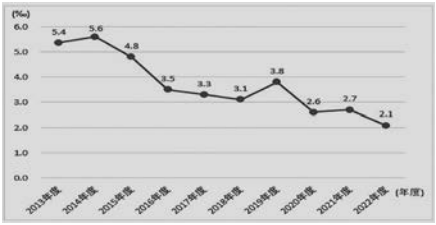


図　当院病棟（120 床）の転倒転落率の推移。2022 年度調査結果は直近 10 年間で最も低い 2.1‰（回リハ病棟協会の 2022 年度実態調査の全国平均値は 3.7‰）

入院時・翌日・1 週後にベッド環境を調整 転倒・転落防止チームが継続評価

医師、看護師・介護職、療法士で入院時、全患者に転倒・転落アセスメントと個別評価を行い看護・介護計画を立案。同時に環境チェックを行い患者状況に合わせたベッド周囲環境を調整、周知（**写真**）。翌日と１週間後に環境を再チェック、微調整する。

多職種構成の「転倒・転落防止チーム」メンバーが継続評価しつつ毎月の病棟カンファレンスで問題点、注意点を再評価している。

活発なリスクマネジャー会議、院内研修 予防策を年々改良、転倒率 2.1‰

医療安全管理者研修を修了した看護師をチーフとした各部署代表で構成する「リスクマネジャー会議」で、毎月、転倒・転落データを含めた医療事故関連事例を集計・分析し、医療安全管理委員会（以下、委員会）に報告、病院全体で検討、情報共有を図る。また、レベル３b以上の事例（10年で18例、直近５年で６例）や注意すべき事例を分析し、委員会に報告。「医療安全情報」などをリスクマネジャー会議で検討し、委員会に諮る。さらに、年１回、「転倒・転落予防のための研修会」を企画・開催する。

この新たな方針による転倒・転落予防策は、2014年から本格運用を開始、年々改善、改良を図って今日に至っている。開始当初、本方針の効果について後方視的分析を行い、転倒・転落が有意に減少できたことを 2015 年リハビリテーション・ケア合同研究大会（神戸）で発表した。その後年々同予防策の改善、改良を図りながら今日に至っている。院内での転倒・転落率は徐々に減少傾向にあり、2022 年度の転倒・転落率は 2.1‰であった（図）。

高齢者や認知症の多い（平均年齢 82 歳、III 以上 39%）当院ではあらゆる場所、時間帯で転倒・転落が起こり得る。その時、とっさに駆けつけ、手を差し伸べ、身体を張って支える職員の目配り、気配り、心がけも事故防止には欠かせない。この現場職員の緊張感をもった対応が、当院における転倒・転落予防策が機能しているもう１つの重要点だと考えている。

（図１）

Introduction 研修医

鶴岡市立荘内病院臨床研修医１年目　神保　瑞希

鶴岡市立荘内病院臨床研修医１年目の神保瑞希と申します。荘内病院の先生方や職員の皆様をはじめ、鶴岡市内の先生方には日頃より大変お世話になっております。

私は山形市で生まれ育ちました。四方を山で囲まれた山形盆地で、市街地にいようと郊外にいようと近くに山がそびえ立つ環境で過ごしてきました。どことなく閉塞感をおぼえていたのかもしれません。気づいた時には、「いつか海の近い街に住む」という夢が出来ていました。

ご縁があって、山形大学の学生時代に１ヶ月間荘内病院で実習させていただきました。実習後には湯野浜の海岸までドライブに行って夕日を眺めたり、先生方から美味しい海鮮料理をご馳走になったりした思い出があります。恵まれた研修環境と庄内地方の風土に感銘を受け、荘内病院で研修することに決めました。

庄内地方と内陸では気候も文化も違い、まるで県外に越してきたかのような気分でした。

一番はやはり方言です。内陸では山形弁、いわゆる「ずーずー弁」が主流ですが、庄内弁は語尾が可愛く、穏やかな印象を受けました。入職当初はなかなか聞き取ることが出来ませんでしたが、患者さんや職員の皆さんと時間を過ごすうちに、自分の口からも庄内弁が出るようになりました。今や山形弁と庄内弁のバイリンガルになりつつあります。

もう一つ驚いたことは、話に聞いてはいましたが風が強い日が多いことです。海沿いの街の洗礼を受けた気分でした。雪国で育ったので雪自体にあまり抵抗はないのですが、こちらの雪は「吹雪」と伺っています。初めての冬を乗り切れるのか、今一番の心配事です。

そんな庄内での楽しみはずばり「食べること」です。ありがたいことに先生方にはよく飲みに連れて行ってもらっています。海鮮はもちろん、洋風のお料理や定番居酒屋メニューなど、どのお料理も美味しくて毎回感動しています。お酒もよく飲む方ですが、特にどんなお料理にも合うビールや日本酒が大好きです。部活の先輩や同期と「ビール会」を結成して、年１回ビール専門のお店で飲み比べをしています。今年で５回目の開催になりました。（しかしこだけの話、家で飲むサッポロ黒ラベルが一番美味しいかもしれません。）また学生時代には同期と日本酒飲み放題のお店に行くこともありました。特に好きなのは「ばくれん」という日本酒です。父が好きな銘柄で、実家に住んでいた時にはよく酒屋から一升瓶を買ってきて、家族皆でぐびぐび嗜んでいました。切れ味がよくさっぱりとしているので、いくらでも飲めてしまいます。意外と新たな日本酒に挑戦する機会が多くないので、辛口の日本酒でおすすめがありましたら是非教えていただきたいです。

鶴岡に来て９ヶ月、今では「第２の故郷」になりつつあります。残り１年強、鶴岡の医療に貢献すべく邁進して参りたいと思います。今後とも何卒よろしくお願いいたします。

医師会ニューフェイス

①氏名（入職日）②所属 ③趣味・特技 ④ひとこと

① 丸山（まるやま） さゆり（令和5年12月1日入職）

② 在宅サービスセンター 訪問看護ステーション ハローナース　看護師

③ 野球観戦

④ 地域医療に貢献できるよう精一杯頑張ります。ご指導のほどよろしくお願い致します。

① 前田里佳（まえたりか）（令和6年1月1日入職）

② 湯田川温泉リハビリテーション病院 看護課　介護員

③ 簡単なお菓子作り、読書

④ あいさつ、笑顔を忘れずに、患者様に気持ち良く過ごしていただけるよう頑張ります。

このたびの令和６年能登半島地震により犠牲となられた方々に、謹んでお悔やみ申し上げますとともに、被災されました皆様に心からお見舞い申し上げます。

被災地の一日も早い復興をお祈りしております。

編　集　後　記

明けましておめでとうございます。今年も鶴岡地区医師会ならびに、めでぃかすとるを宜しくお願いします。

日々の外来で患者様とお話ししていると、どの業界も人手不足で困っていることを耳にします。「入社して何年にもなるけど、新入社員が入って来なくていまだに新人で下働きだ。」とか「70歳台の正社員が辞めでしまい、私ともう一人のパートが休日返上ではだらがねばならなぐなった…私らも70歳過ぎでんだげどの」等々…。かく言う当院でも、最近はほぼ全職種人手不足で、募集しても応募のほとんどない状況が慢性的に続いております。

人手不足に陥る企業の割合は年々増加し、コロナ禍以降に顕著化しているそうです。人手不足に陥る原因は、大別すると「少子高齢化」と「人材のミスマッチ」の２つが挙げられるとの事。「少子高齢化」に関しては、日本は世界的に見ても、急速に少子高齢化が進行している国の一つで、日本の生産年齢人口（15～64歳）は1995年をピークに、総人口も2008年をピークに減少に転じています。また、2030年には「2030年問題」と言われているように、7073万人の労働需要に対し、見込める労働供給は6429万人であり、644万人もの人手不足になると予測されています。「人材のミスマッチ」に関しては、土木・介護・サービスに関する業種は人手不足が著しい一方、一般事務や会計事務、運搬・清掃・包装等の職業は人材の余剰が発生してます。「求人を出しても採用できない」と困る企業がある一方で、「仕事を探しているのに見つからない」と悩む求職者がいる。労働力不足と構造的失業のダブルパンチが、慢性的な人手不足という事象を引き起こしているのだそうです。

２つのうち「少子高齢化」のダメージの方がより根源的で、生産年齢人口を増やすことが急務と思われます。世界を見ても生産年齢人口が国力の源であることに間違いありません。

辰年は陽の気が動いて万物が振動するので、活力旺盛になって大きく成長し、形がととのう年だといわれています。これまでの辰年も、努力した成果が実を結ぶような出来事が多く起こっています。

2023年４月に発足したこども家庭庁の加藤 鮎子大臣の努力が今年実を結ぶよう願っております。

（阿部　周市）

編集委員：渡邊秀平・菅原真樹・吉田 宏・阿部周市・真島英太・中目哲平
発 行 所：一般社団法人鶴岡地区医師会　山形県鶴岡市馬場町１－34
TEL 0235－22－0136　FAX 0235－25－0772　E-mail ishikai@tsuruoka-med.jp
ホームページにも掲載しております 鶴岡地区医師会 検索 URL https://www.tsuruoka-med.jp